吉田　五郎

よしだ・ごろう

精機光学研究所（キヤノンの前身）の創業者

経　歴		
生：明治33年(1900年)		
没：平成5年（1993年）、享年93歳		
大正4年（1915年）4月5日	15歳	広島県立福山中学校入学
大正6年（1917年）5月29日	17歳	広島県立福山中学校中退・上京
昭和8年(1933年)11月	32歳	精機光学研究所を創設の発起人の一人として参画
昭和9年(1934年)秋	33歳	精機光学研究所を去る

生い立ちと学業、業績

明治33年(1900年)、福山市に生まれる。
大正4年(1915年)広島県立福山中学校(現広島県立福山誠之館高等学校)入学。
大正6年(1917年)に寄留のため退学届けを提出、受理される。(出典2)

上京後、映画用撮影カメラや映写機の修理、改造の仕事に従事する。
1920年代後半、20代後半の青年だった彼は、部品調達のため、頻繁に日本ー上海を行き来する生活をしていた。そんな彼に高級35mm カメラの製作を決意させたのは、その上海で出会ったアメリカ人の貿易商ロイ・E・デレーの言葉だったといわれている。

―　なんだってお前はこんな所に買いに来るんだ。お前の国には素晴らしい軍艦や飛行機があるじゃないか。あれだけの軍艦を造れるんだったら、こんなものくらい造れない訳がないだろう　―
元来機械いじりが好きだった吉田である。映画用機器の修理、改造という仕事柄もあり、自然、カメラの製作に執着していったとしても不思議はない。
「なんでもいいからバラバラに分解しちゃってね。一つひとつ眺めてみると、まさかその中にはダイヤモンドも何も入ってやしないやね。真鍮とアルミと鉄とペルシャゴムなんかでもって合成されてるもの。一つにまとまると、ものすごい高い金で売れるんですよ。それで、そいつがしゃくでね」後年、吉田はライカを分解し、国産高級35mm カメラを作ろうとした動機をこう述べている。

妹婿である内田三郎(1899～1982年)、内田の元部下前田武男(1909～1977年)とともに、

高級35mm カメラづくりの工房として、東京市麻布区六本木(現東京都港区六本木)の洒落た3階建てアパート(竹皮屋ビル)の一角に、精機光学研究所を創設したのは、昭和8年(1933年)11月のことだった。しかし吉田は、精機光学研究所のカメラづくりの方向性が自分の考えと次第にそれていくのを悟り、翌昭和9年(1934年)秋、研究所を去ることになる。

幻の試作品「カンノン」に込められた夢

「カンノン」という名称は、観音教信者であった吉田が命名。マークも千手観音、そしてレンズにも、ブッダの弟子であるマーハカサーパに由来する「KASYAPA=カシャパ」という名前がつけられた。

初めての高級35mm レンジファインダー機の製作。そこにはドイツはおろか、西洋に負けてなるものかという技術者としての誇りと夢が込められていた。　（出典1）

出典1::『CANON CAMERA MUSEUM 歴史館 キヤノンカメラ史』

出典2::『広島県立福山中学校 学校記要録』、大正4～6年刊

2012年10月15日更新●